

4857

特 11

490

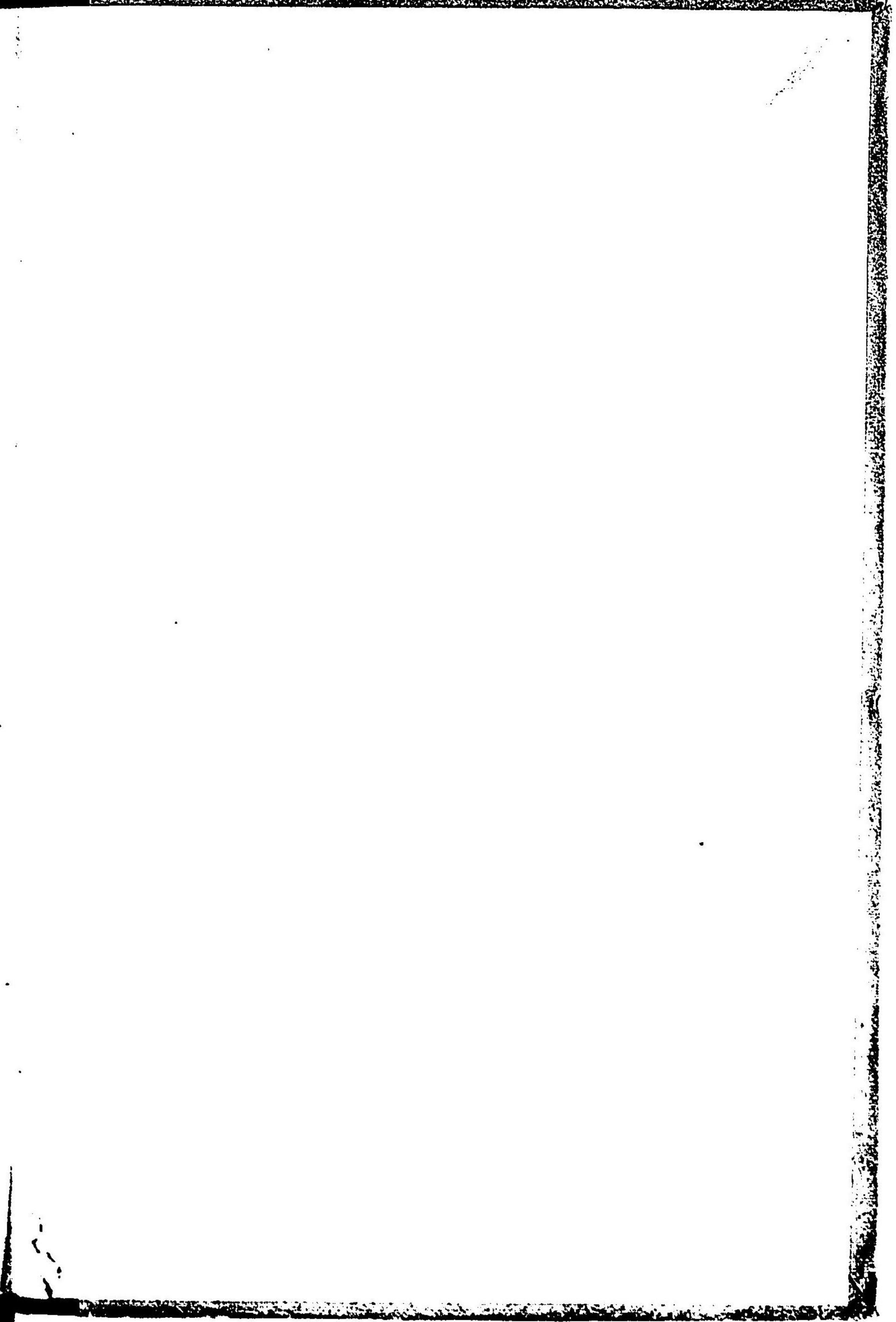
悟道中

地獄傳信記

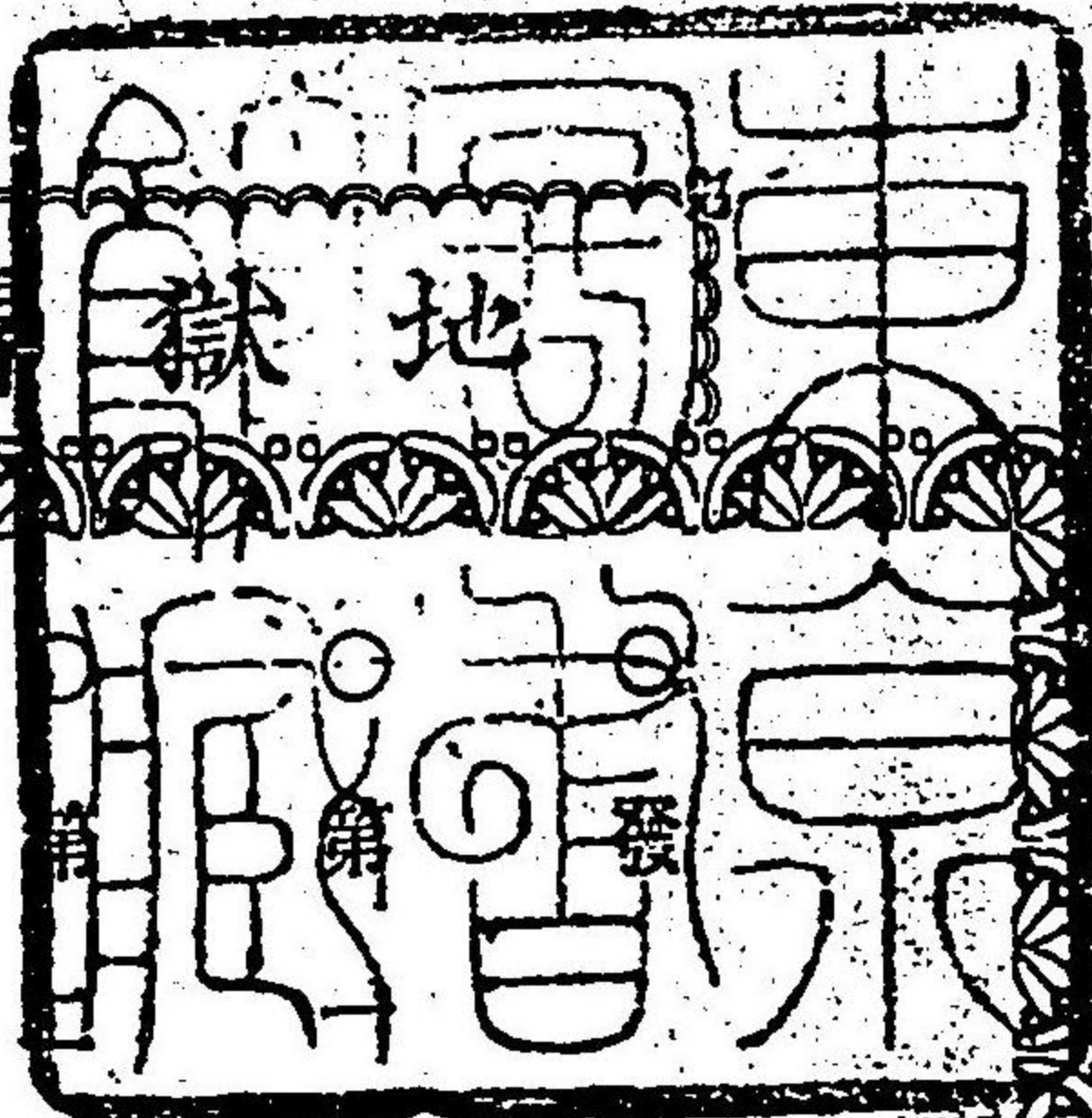
大業散人著述



日本石印局代印



東地獄傳信記



- 第五報
- 第四報
- 第三報

報 報 端

目次

火の車に乗て地獄へ出立
 小野の三途河上小町信女が奪衣場
 城山の六街道頭に隆盛居士が私學校
 大門口に竹市川右衛門治が初演劇場
 喉元町に本春太夫が新淨瑠璃
 三丁目の角にスチャカ鉢は浮田の五龍圓
 四丁目の邊にスチャカ鉢は浮田の五龍圓
 紙橋の四番町にお岩が幽霊共進會
 釜底の谷にお岩が幽霊共進會
 血池の吉原小麻呂に丹紫が手管の指
 針山の花見小路に丹紫が手管の指

○ 第六報

○ 第七報

○ 第八報

○ 第九報

○ 第十報

○ 大團圓

以上

焦熱會堂に自由黨の政談怨舌
叫喚議院に常置員の地獄苦會

燈真路次の暖味宿に小娘お染が
竹根新地の舞踏場に舞妓お染が

業量秤新道の裁判處に目玉判事
業道河岸の警察署に髭揉警視が

見目通りに鼻新問の發行業
金番町に爪火銀行の朝市

閻魔の皇靈祭に賽川原の夕涼
地藏の天皇長節に公園の朝市

閻魔の皇靈祭に賽川原の夕涼

地獄傳信記序

本葉和尚浮世の穴以穿ち盡し遠く地獄の珍説
を求めんとく司命司祿の紙筆以かりみる目か
ぐ鼻の探訪よ六道の辻の賑ひ三途の川のあり
さまはもとより針の山血の池の近況まで何な
ぐりてその明らなる事浄玻璃の鏡の如く鬼
の眼よ見残したる事もな一名づけく地獄傳信
記といふ此頃書肆稿を購ふて梓よ書せんと乞
ふ和尚もとより愁深したちまち閻魔の顔以地
藏よ作りそこが所謂地獄の沙汰も金次第六文

の銚錢よほらぞんば與へん来年の事鬼の笑ふ
所明日ともいはせ今携へ去きと別ち與ふ偶客
あり真々真ツる予は詰り問く曰く稗史野乘固
より世は益なし況や地獄極樂の説佛徒の大法
螺よ於く汝や那んぞ信ぜるよ足んや然るよ和
尚信ぜるよ足ざる事汝信じく戯筆汝弄す嗟汝
るしい哉く君嘘とするる實とするる予ゲヲ
くと笑ふて答へく曰くなんぞかくの如く吾
子が理は暗くく迷へるの甚しきや和尚元来
滑稽家の親玉洒落人の頭取なりいたづらよ大

嘘汝うなつくる人汝馬鹿よせせ諺よいはせや嘘
汝はけハ鬼その舌汝ぬくと和尚なんぞ舌汝惜
まざらん吾子信ぜよく猶信ぜせいで其嘘實
汝究然んと欲せば試は死んでみなさい直も分
ると客閉口してコソくと去る記して以て序
詞とす

明治十七年十月卅一日債鬼汝地獄宿よ避
る螢真き養室よするは

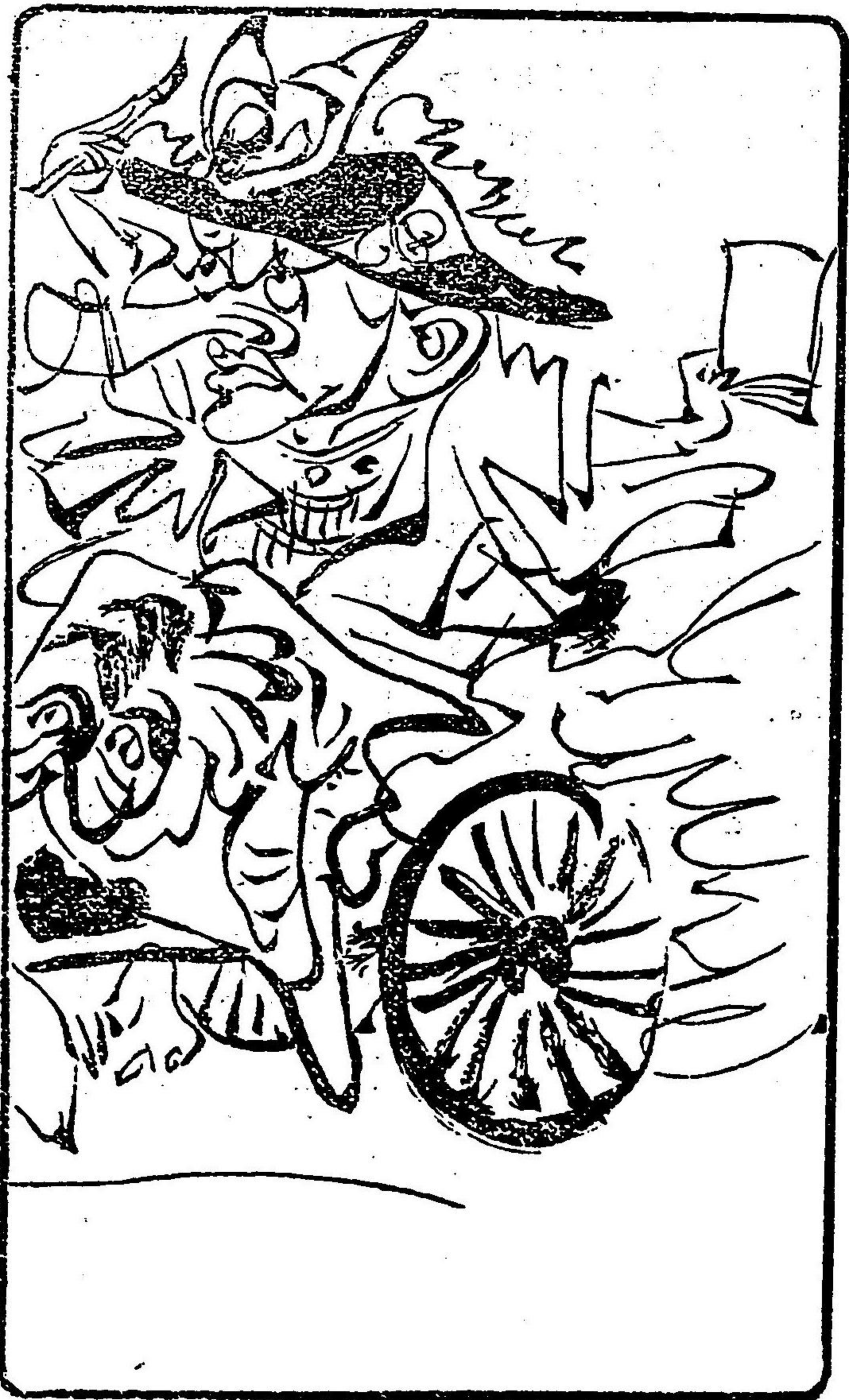
○地獄傳信記

深世一分五厘庵藏編

一 夫れ瘦脇を立て肥ひの尖りたる面つゝ案するも極樂は十
 万億の西よいて地獄は鐵田山の北よ在りとは印度の古先
 生が定説なれども聞たばかりで見し事なく極樂遠きに非
 す善心是れ淨土なり地獄また他よ非す惡念即ち泥梨なり
 とは。道話流の禪師が常談なれども悟りよ過て實地に及ば
 す。サレバ地獄も極樂も傾城の眞の如く有とも云す無とも
 申せず。有ものはあり無ものはなし。といふ説をなす者よ至
 りては只是れ雲と摺ひの似悟り果してさうとも認可し難
 し。サテハ地獄は現在にありといふ説の如きは元祿以來世

二にありふれ一馬鹿廣言。果してありや果して無か天竺の先
生も死でより三千年。熊野の比丘尼も去て跡なし。問ふ人
なく行ふ瀛車なく郵便馬車の便りもなければ有といふも
議論又過す無といふも理屈に似り。理屈と議論を透出して
百尺竿頭更一步を進めて看ばどうやら有やうも有り
無やうも有り。考る尽て疑がひ生か疑がひ疑て思案も能
はずツイとろく。と目蓮が居眠りを學ぶ折から。郵便の聲
又驚ろき眼をさまして端書を讀ば其文に曰く。前文御免下
さるべく陳れば地獄極樂の御心配は地獄(至極)御尤もに
い間此の火車のりて迅速御來車下されたく地獄は申す
に及ばず極樂までも御案内申上べく。早々頓首時に地獄
紀元八万四千年盈の十五日地獄政府外務接待員アピラウツ

三
ンケンとぞ記したれば日比の疑團忽ち晴て去バ地獄を没
遊して其の景況を娑婆へ報知せんと出立ける。抑く散人
此日の打扮は。鍬形打たる帽子とナボレ翁も着な。卵の花
威一の鎧の上に緋の衣を着て。右の手は一本一厘ばかり
の大身禿筆をいとも輕げ提さげ。真葛原の若隠居木葉散
人と記したる馬印を鼻の端にぶらさげ。宮さんくお前に
アラくするのは何ぢやいな。ア一レは朝敵征伐制度の錦
の御旗を知らないか。トコトヤレトヤレといはぬばかり
の大音聲ヤアく。遠き者は尻の音にも聞つらん。近きは寄
て目にも見ぬ小男なれど。故攝河泉の大守楠判官正三位平
の義経が遺胤。西塔武藏坊にて人と成。熊ヶ谷道生北面の
武者所瀧口藏人仲國が一子木葉和尙なるぞ。者共車を引寄



六べーと下知の下よりハツと答て引出す火の車に乗を相圖
 に前鬼後鬼。臺傘立傘大鳥毛朝日輝く金紋の五三の桐の
 前箱後箱。非常警護の鉄棒の音も勇まーき行列は。ヒユウヒ
 ル。ホットイヲ(ラツバの音)クラクラハタハタ(火の車の音)
 と早くも地獄の八丁目初面屋彌治兵衛方よぞ着にける
 編者云是より地獄の景況は漫遊の都度電報を以て報
 じよせーを逐次又掲載せしものなれば看官そのつも
 りよて愛讀あれ

○第一報

小野の三途河上に小町信女が奪衣場
 城山の六道街頭に隆盛居士が私學校
 野の山上より出て彼の離鳥と久我之助が浮名も高き妹山

脊山の麓を流れ遙々、に紀三井寺の下を廻り。紀伊の國
 は音無川の川上に合して。地獄餓鬼畜生の三國に亘る大河
 なれば名けて三途の河と云ひ。坂東一の大河にして下流に
 島田金谷の驛ありて。天道様も聞えませぬとあさがは女史
 も其の洪水をなげき。且又た橋が瀬といふは此驛より良方
 よあたりて平等院の邊り。治承の昔。佐々木四良高
 綱と梶原源太景季が先陣を争ひ。舊跡なりと云ふ。サテ又
 た河の南方を小野といひ北方を向島と名け。数千株の櫻あ
 り名物よは業平餅と都鳥といふ菓子。賣る(記者按ずるに
 小野と云ふ地名は小野の箇朝臣に因か。此の人曾て娑婆に
 在り。比常ふ地獄へ往來せし處と死の六道生の六道と云由
 載て山州名跡志にあり。地理によつて考ふるに止邊よ六道

八の辻あり故に對して小野と云乎。或ひは小町の名よるか
覺束なし。其の業平餅の如きは小町に一對せしものにて餅
屋の頓智よあふす。好事家の滑稽なるべし。右は渺々たる
る曠野あり。左りに漫々たる河原ありて。中に一軒の西洋造
は是なん。小町が奪衣場。二本のガス燈は間廣大王の眼
よりも光り。一つのランプは都踊りの電氣燈よりも明るし
奪衣の上官小野の小町はあなめく。となげきたる。白骨か
と思ひのはか。花の色香もうつろはす。有しむか。一の黒髪も
浪のうねく。生けりて。此の地獄へと返り咲き再び開き
し優曇華の花の姿も。東京風。誘ふ水氣も。ツツア。と十二一
重を。黄八丈。鏡前博多の帯を。め。黒縮緬の羽織を着て。かど
島田に一本。釣といふ。品格は。後家の質屋に直路をさせて

も膳所裏邊の娼妓よりは下々ぬといふ。評判なれば。三途の
老婆の後目を續し。より此の色香よめで。浮れ来る亡者も
多く。随つて奪衣の數も多けれど。も。近比亡者も困窮して。經
帷子も大鉢金巾を用ふる。よ。付。數の割。金は目も少く。ソ
コ。テ。小町が發明。よ。是。を。娑婆へ輸出せし。處。意外に賣口多
く。蒲團の裏から。幅幅傘。女郎の紅。襦に。送用。る。ゆ。糸。に。ます
く。盛。に。賣。いだ。己。に。新。京。極。の。如。きは。此。の。金。巾。よ。て。夏。季
は。悉。皆。日。覆。を。する。とい。ふ
ドンくたる舟。わたの音は。チャブくたる。水。壁。に。和。し。オ
イ。エ。渡。守。り。船。人。さん。と。渡。舟。を。煎。で。三。途。河。を。越。は。六。道。の。辻
にて。此。通。を。松。原。通。とい。ひ。六。波。羅。密。寺。の。邊。よ。愛。宕。とい。ふ。處
九。あり。て。八。月。の。九。日。よ。は。高。野。楨。を。賣。る。又。た。街。の。兩。側。は。吳。服

店までへい、貴亡諸君お早うお着で五坐り升私一は大坂心齋橋一丸の出店。ふんどしやお湯巻の御用は五坐りまへんか。へい拙者は御存玄の京都は四條御旅町襟巻でございます姉さん方は半襟はいか様でそ。オツト此方は東海道の名産有松絞。お釜入の御用意お裕衣はいりませんか。と、めくれ亡者はかのか、衣服を買調ゑて此所を過れば。右に城山ありて立派なる三階造りは是ぞ西郷南洲が私學校なり。元來おの城山と云は西郷が討死せし處と云傳ふれども附會の説にて。實は巡禮お鶴の笠の銘にも有通り迷故三界城悟故十方空といふ。三界城のありし處にて平親王將門が住跡を五稜廓と名付たれども今は門も顔れ壘も破れて只存れるは酒頭童子の首塚のみなり。却て説く南

洲の私學校は其名を聖丸塾と云ひ。學科は西郷哲學にて暴徒主義なる由。其の卒業は甲科を彈丸雨注といひ乙科を竹鎗席旗といひ。一時に亡者とふやそ主義なる故。過日も問魔大王の御手許より特別を以て文久三文を賜り一位なれば。なか、三田の福澤が開き一學校にも。おさ々々おとらぬ盛大なりといふ。

○第二報

大門口に市川右團治が初演劇場。喉元町に竹本春太夫が新浄瑠璃。

地獄經に曰く大鉄四山の北よ世界あり名けて地獄といふ。此國の入口に大門あり出口の柳に衣紋橋など名處多しと。かや云り。實にも要害堅固なる大門口突棒さそ又鎗もぢり。

十手取繩火の車そのいかめしき門番所と過れば五軒の機
をなすべし芝居にて向は有名なるいろは茶屋尾張や大吉
山城屋みやま泉正たかさごなど、家号くくと記したる掛
暗灯に染のれん中村市川何にく丈への轆もいげくいろ
はには影のなびくも似り五軒の芝居の躰裁はすべて大坂
道頓堀の如くなる中も男の地獄坐といふは新富坐の普
請方何某の工夫を凝せし作事だけありて表付は巡査の屯
所のやうに見ゆれどもナラシの構造雨さまき花道の模様
等善と尽し美と極め殊に市川右團治の一坐なれば所謂
千兩芝居を場棧敷とも七分通り追込の六錢と外に茶田菜
粉盆を合して僅かに八錢で見るといふか見物の集まる
は無間の釜に亡者のむふがるが如く女共のうつに成は

血の池にたやうに似り且又此の狂言の趣向といふは竹
田出雲が新作にて外題と戀手本逆臣藏と云ひ高の師直の
母顔世に鹽谷判官が戀歌を送つて遂に鮎と鯉との好中と
なりしを若狭の助が岡焼めて本藏も命け顔世を殺させん
とせし處加古川の間違えて顔世と誤て將軍の御愛樹と取
違ふ尺八で松の枝をさりしが科になり鮮の足を頂戴して
大星由良之助が切腹せし恨みを晴さんと。猿坂内が腰元
かかるとを連てのくをソレやつてはと與一兵衛が二ツ玉で
打とめしは獅にはあらで吾兒の勘平ソノ菩提の爲におい
し力が彌の家へ押付嫁入り娘小浪は一力へ身を賣て寺岡
平右衛門をメ殺し刀は正宗指添は浪の平行安と持て天川
屋儀兵衛が九太夫の屋敷へ討入といふ迄が前狂言中幕に

じは帯屋の長右衛門。現在父御に駕か、せ去年の秋のわづらひにいづそ死だがまいかいナと新たに作りし浄瑠璃の可笑さあまりて悲しさに鬼の目にも涙をもやらす大評判。此處より前途をながむれば左に比叡の山そびる。麓に山王二十一社中堂講堂戒壇堂いらかを並べて建たまふ。右には所謂東山祇園清水智恩院四天王寺の塔までも眼に入て鮮やかなり

○第三報 三丁目の角にどんぶり鉢は浮田の五龍園

サテ此邊は地獄第一の繁華よて商店軒を列ねて往來群集せり。かの有名なる浮田の薬店は角引廻したる大家なり。数多の手代門に出て「サア」か求めなはい本家は太坂心齋

橋安堂寺町に八ッ棟造り上り下りのお客様方のお目印には金剛石の金看板。寶丹主人が守田流に筆を揮ひし五龍園。サテ此の妙薬の始まりは人皇六十五代後漢のナホノ翁が應仁亂の時蜀の弁慶と金剛山に戦ひ玉ひ楠公が地雷火にて御尻を打せられてより頭に疝氣の御惱おされり。依て達摩大師に五百人の童男童女を付けて英國の不二山へつかわしめ。アラ、カラ、の兩人の仙人よ命じ五劫思惟長劫永劫の苦修練行よて製るたるを。水師提督ペルリといふ者より。時の大老大川越前守へ黒舟に載て奉つりしを。子細あつて吾家先祖代々孫子の末々六親眷属向ひ三軒兩隣りまで傳はりたる良薬で五坐い。ソナラ功能はとお尋なくとも申上げます。第一疝氣に利は云までもなく。其外いば痔とだつ

ほう 痔。足の頭痛と天窓のしびれ何やら。二日酔まで付て
即坐に直る事は受合の西瓜。中家で真赤な盧ぢや五坐らぬ。
一服は僅か一錢と五厘なれども地獄の里も金次第。五錢十
錢と高い方がよく利くと喋べる此方は見世物小屋。ア見
るも。後生ならまた見れるも。御所の博覽會で御評判にあづ
かりました。僧妙心の干物で五坐。國は甲州水上の郡親は代
々殺生すき。おはれなる哉親の罪が兒に報ひまして生れも
付ぬ干物の体を。今度西國四國を巡禮のもどり。御當所へ立
寄まして千人又見るも罪亡ぼし。ドゥツ見おやり遊ませ大
人方は一錢お小兒は五厘錢はお返り。彼方は覗きから
くり師よて江戸は本町の二丁目。角引まわした八百屋店。
ホイ伊勢参宮の戻り路石部の出齒屋の借りまくら。ホイ先

には制札紙のぼり罪の次第を書記す。ホイからくり換れば

城山ぢやア

且又た此方は食物店菓子。良則さくら餅。すいめすいやに
永代園子。東吳のうなぎ丸万の小田卷。姥が餅やに虎屋の餅
頭。流錦亭はせんざいに花遊軒は平ぼうだら。粹と甘い店
續き中も一層目に立は甘井漢造氏と名のりたる。ホツク
の良醫が門構へにて見越の松に舟板塀。四ツ足門に玄關付
き。正面には古代の衝立を見せ。よろしき處に藥篋。金匱本
草造化機論などを列べたり。サテぼつくと云は疥癬。楊梅
瘡風邪ぼろの類よて。すべてホツくと吹出す者を療治
するに妙を得たれば。其名を私立ぼつくと病院と名け。患者
の車は門前に市をなす先生。懐中は菓子料にあた。まれ

りといふ。サテまた隣家は鬼のふんどし店。雷神の太鼓や火の車の製造場。鉄棒賣捌所無間の益屋針の山のみすや針なと軒をならべて商なゑり。向ふは名高き紙の橋。長さは地獄にかたどりて一百三十六間。巾は鬼も十八間なるが。梅の木西の洞院お茶屋の書付け無心状。逢状の切れ端紙券のあまり。花山帳の古手をさらはず。紙とさる云は向紙を論せず張つめたるが近來破損せしを以て。西洋紙よ掛換るといふを開き。有名なる佐田介石師は今日の六益社の説教に其の書なる事を演説する由

○第四報 紙橋の番町にお菊が欠皿検査場

そもく地獄と一百三十六地獄といふは、大區を八區に分

ち一大區毎に十六の小區あり合して百三十六區となる。其の一大區を紙橋區といひ。京橋より通り十二町の間の總稱なり。その東側に日報社の隣に高き八枚は是なんお菊が欠皿の検査場に。彼の有名なる田中平八氏俗名糸平なる者の設立まかり。是まで地獄の風習として鉛の熱湯。水のナシく。ヒヤ杯を罪人に呑せる器は。かならず欠皿と用ふる事なるが。近來その欠皿の製造人等おのく粗末の品を造るやうになりしかば。其弊をふせがんが爲に此の検査場を設け。鑑定官は番町皿屋敷の下女お菊と以て其れ上官とせり。今日は例れ検査日として本場は紫宸殿へ積上し陶器れ敷は濱れ真砂れ如くなる中へ。シツく熱山すは鑑定官れ下女お菊。赤地錦の直袍に西陣別緋の小倉帯を猫ぢやらしに

結び。投げ島田の洗髪へ。籠甲の帽子をかぶり。檜扇と持ち。テツキを突き。一々欠皿を評するやう。京都清水の欠皿は。藍色の如し。今少し氣は往がたし。と第四等の証と下。次に。子九谷は。畫の密なる割には。土の色赤し。是は田舎娘が。紅白粉をつけたる如く。未だ十分の美とは云がたし。サテ又尾州の七寶焼は。土色彩色製造とも云分更になければ。餘り奇麗すぎるから。華族のお娘様といふ評を下さるを得ず。別嬪なれども粹ならず。奇麗なれども雅ならず。惜い哉。第二等なり。次に唐津の皿は。藍は一等なれども。土はあまり。感心しがたし。之を評すれば。西洋の別嬪の如く。美人なれども。ヤボンの香をのがれ。或ひは。今戸栗田焼。または備前に瀬。

戸五條。いまだ充分ならざるもの、如し。と。かの。鑑定。検査の評を下し。サテ妾の望むは。京の藝妓に。東京の氣と持せ。大坂の新町で。長崎の遊びをするやうに。清水の土と。瀬戸の製。よて。唐津で。焼き尾州の彩色とすれば。第一等なるべし。と。演舌して。此日の検査は。果にける。尾上菊五郎の十八番。市川右團治の得意の。惟。曾て。稻荷と。あがめられて。根津吉原の。藝妓。連に。信仰されし。四谷の。か。岩女史は。博物館の。異員。中より。此の。共進會。は。惟長に。撰。振。せ。られ。て。審査。場。に。中央。に。坐。を。構。へ。た。る。左。右。に。は。各。幽。靈。の。出。品。人。おの。く。髪。振。り。亂。し。白。の。禮。服。を。て。列。を。正。し。て。並。居。たり。斯。て。夜。も。早。や。午。前。二。時。山。寺。の。鐘。幽。か。に。報。じ。血。な。ま。ぐ。さ。さ。一陣の風を。和圖に。焼耐火を。燈すや。否や。銘々。藝を。始めける。

「絹川の水音物そごく土橋の柳風血なまぐさく。忽ち堤畔より奥右衛門殿と現れは醜婦かさねの亡魂なり并戸は崩れて水濁れんとし瓶繩は朽てまさに切んとそ後手に縛られ一箇の怪物イイチマニ二枚と叫ぶ若は下女お菊の幽霊なり「碁盤の邊りよ立は安部仲磨が亡霊お茶坊主お眼玉とむくは佐倉宗五が幽魂なり。或ひは南瓜の目鼻徳利のおどり。三ツ目入道四つめのお六。或ひはかい撫で海坊主傘の蛇の目にいたる迄ドロく然うらめしい手と力を極めて化たりける「此時お岩は各幽霊に告るやう。何れも勉強の功みふて中々よく化られたり。予輩は實に恐しきまで成心致せり。去乍ら一等賞たる金印を授くべき程の遊は之なり。乞ふ其の理由と左に陳述せん。今ま諸君の化様を案するに大

概圓山應舉氏の巧みに出たる元祿時代の番風のみと云ざるを得ず。己に娑婆に於ても俳優の幽霊をそるや年々新工夫を出すと聞り。予輩去る盆の十五日たましく休暇を得て大坂までまかり越たるに。全地の猫殺し市川右團治實川延若また西京の中村小陣の如きは。大いに此技に長じドロくの焼酎火も古めかしければと看官の頭より現れ。うらめいの詞も俗なればとて吾曹怨みに堪ず乞ふ汝を取殺せん。または我等汝しをうらみはんべりと日本詞や漢語に變ても。また面白からざればむしるチ、ソ、プ、イ、ク。チ、コ、ニ、ヤ、ン、チ、ウ、杯と洋語にするに如すと云居る由。娑婆の幽霊すでに是の如く開化せり地獄の幽霊なんぞ元祿の番舞のみを守るべけんや。宜しく舊風を蟬脱して新趣向なる改頁なかつ

ざるべからず。是れ閻魔大王の此の共進會を開き、
以なり。蓋し幽霊は人を驚かすを以て主眼とし、怨み、晴す
は第二着なるもの、如し。果して然らば各自新奇發明の権
力を現はし、第二會の共進會には十分の恐みを見せ、之を
嬰の實地に施行して地獄の威光を人間の吃驚虫に示され
よと。述終り時すでに夜明に間もなければとて一先閉場を
せられけり

○第五報

血の池の吉原廓に今ひらさきが手管の傳授
針の山の花見小路に丹二良が色事指南
そもく血の池と云は深サ首ツ丈みて廣サは八町四面わ
り。世の親々が可愛娘を吉原へ沈める時血の涙と流したる
が集まりて池となるが故に血の池と名く。此水鉄漿溝を通

りて川となれると鴨川と云ひ。上には木屋町先斗町下は
西石等の紅樓軒を並べ。東は築地の竹式樓永代橋より川下
を中島と云ひ向ひは夷橋にて九良右衛門町より坂町に續
き。高津の神社芝の神明。濱の離宮より忍ばすの池まで見晴
して眺望第一の地なりといふ。却説此の池を廻りて建列ね
たるが吉原廓にて細見記を按ずるに此廓は京の三條また
三條合して六條三筋町に在り。大佛殿建立のみぎり。傾城
局の別當齋藤實盛に命じて今の地に移さしむ。サまた此
の地の女郎は上等を太夫といひ長山小町薄雲和歌雲など
首魁たり。中等を天神またはマコトといひ一夜の花傾は上
等は二圓中等は七十五銭にて皆人の知とあるなり。下等は
娑婆の聖賢街の如く一寸鉄炮を甘銭とすれども五銭何個

かを増すおとあり。龜鶴政尾初榮等最とも全盛なりといふ。五街の青樓多き中に伊左衛門が夕ざりに浮れし新町の屋あり。三千は美人あまたなる内に頼兼は怒りよふれて三又此泡と消たる高尾も居り目せき笠は賣商多く誰そや暗灯は光り繁し。サレバ夜毎に浮れ来る鬼も角をバ頬被り。歌うたふ衣紋坂。竹屋は渡舟を呼とても廻りて来さる。緇に振れて戻る土手八町田圃は蛙が笑ふとも河岸は女郎が泣うとも今宵も通ふ色は道血は池よりも深はまり隠すとすれど世の中は見目嶮身仇口は浮名は針は山より高く。ツイ借金に首械に無間地獄へ無期徒流傾城買は成は果は婆も地獄も秋は暮いづくも全玄哀れなり。錦は裏と穿ちたる女郎が部屋は晝は景は。野暮れ知ざる有様よて。金瓶樓は

奥二階に今日も客は荒はせり。食氣に凝て焼半を寝乍ら食は是も昔は時次良に浮名をわけし浦里なり。窓に映れる夕日に向いて天は岩戸を開帳して。ソノ何やらは毛ぢらみと。ひねり潰すは是もまた昔は色は小紫あまたは女郎が打群て客は悪口柳かろく。好郎は自惚や樓主は悪雑木雜互ひは批判。共に地金を打出して焼刃は色を離れたる是れ傾城は道樂なるべし。折しも湯より戻りたる今むらさきは肩に手拭を掛たるま。オヤ。何妓も色氣はチイ事だ。ソ。此は池粹香ない容ぢやい。くら野呂間はお客だつて。三會四會と戻りた利ないはも無理はチイ。全躰手管と云もは眞から底から惚たらしく見る事をいふはだ。近來野暮も大層開けて来て。女郎は欺すもはだからお客は程よく欺されて居

るやうな面をするが却つて女郎お勤だ杯と飛だ粹がりを
 云やつが有からか困却様サ。だが斯云ふ人物をうまく口
 と。家も藏も御遠慮申さず此方れ物おするが眞實れ手管
 といふもれ其れ手管をやらかすは。別お指切り野良でも此方
 古い趣向をやるよも及ばず。どんな粹がりれ野良でも此方
 はいつもれ色氣たつおり。間夫れ取級かひで朋輩よも仲居
 ままで。彼妓は誰某が好だ色だと云れる程お。やらかす時よ
 や達磨大師でも傘一本でお寺を開かせる事は朝飯前れお
 茶れ子才々。だから部屋でも少しは色氣を持って。時々是ぞと
 ねらつた客れ事なを云出し。いよ。彼妓は惚てるさう
 なッレヤあんまり長なかるうがと。朋輩までが異見をす
 る位のぼせ上つて見せる時よはいかな野良でもコロリと

かいでるよは違ひチイノサ。そよを川柳よ指と切るはまよ
 と苦肉れ計りごと。云たもれぢや有んせんかど喋り立ち
 れ一。同アット感心する折から禿が走來り。娼妓お客です。一
 吉原より東へ隅田川を渡りて生田れ社れ前と遇れ。南よ高
 く不士築波上野待乳れ山そびる。東お將軍如意ヶ織金峰よ
 一野れ峰高く。天保山れ麓より一れ谷へ積きて橙れ浦を前
 と一舞兒が濱を後と。箱根れ山お對するは。是ぞ名高き
 針れ山よて麓は橋場鈴が森。今戶れ里より嗟。越御室。狐川れ
 渡舟を。左おとれ。品川驛。右は北海道へ。近徑よて。カ
 フト千島エザシへは。僅かお二里と十八町。ソノ四辻を南へ
 行ば。建仁寺より安居れ宮へ通る片側町を名て。花見小路と
 いふ。初音路子れ奥れ方おあつらる通りれ粹住情居。主人は

二世

則ち丹治良みて早朝より色事指南に講釋を初ける夫れ色
事此肝心は芝居に若殿様を學ぶ在り也。ヤリヤの哲學
ヤンバリ一氏が亞洲歴史に記したるが吾祖在原や業平が
之と解て云ふは金で情けは買ぬもので若殿の如きは只一
心に太夫くと思ぬき色紙の紛失も家老の横領も委細か
まわす。只太夫で無ければ夜が明ぬとまで登りつめるから
太夫も殿さんくと思て來て他の人なら妾どうでも否ぢ
やわいなアとおいでる者なり之も反して同じ。若殿でもお
ごりに耽り所謂る自惚といふやつが有る頼兼公の如死な
らばたとひ男が善て金持でもソシテ高尾がほれぬよわら
すや。是よよつて之を看ば山家屋清平さんの曰くよも。面
色事はしまへぬ。オホソ。と五尤なるお詞でござる。故に色

三世

事は金でも出來ず男前でも出來ず。よーや金で出來るやう
な色なれば只おれ浮氣の仇惚みて。金のきれめが縁の切目
九面で死たら又おいでといふやつみて。いまだ眞の色とは
申せず。彼の死なば諸共二世三世と親の異見も何のソノ石
をも通れと一念あつて此世で添すは未來までもと。やらか
すやつは只ひとつの情けといふ婿しい處も惚るものなり。
去バ古市のお今といふ藝妓が貢どかいふ手古變も惚れき
つたも蓋し一つの情愛よよるか。其の情を知らる人を玉の
盃底あり男といひ此書の作者木葉散人もまたその一人よ
て。新造へマホン婆さん腰ぬけと全子に血道とあける女の
多きも。情を知りゆるならんか。と云折。門より投込む端書
戀しき丹さんまゐる深川にて米字とあるよぞ丹治良ハ文

面をよくも見ず。また呼出かア、うるせゑ是だから色男よ
はなりたくチイノサ

○第六報 焦熱會堂に自由黨の政談怨舌
叫喚議院に常置員の地獄苦會

堂は民權に熱心するを以て焦熱と名け。會は地獄の壓制を
怨むが故に怨舌と云。東洋弁士藤田某。和泉式部女史。曾呂利
新左衛門。等の諸弁士寄集りおのゝ主義は七面鳥を母と
よもか、はらず。立派な論題を貼出せり。清佛の開戦に就て
吾國將來の見込み藤田某。教導職の廢止。曾呂利新左。○公
○より金をもらひ一とは果して信乎(客員何某)女教新説
(和泉式部)サテ會場の左りに角いかた一控ゑたるは有名
の中止警部。官劍歴也。自由氣良比。の兩氏なり弁士は各

々得意の迷説を堂々として述べる容は。三途の河の淀まざる
が如く。その説の確なるは淨皮梨の鏡も掛て見に似り。ヒヤ
と吐鳴ノ一と。叫ぶ聴衆は。獄卒阿貴れ音も過たりか
る處へ客員の飛入として演壇へ昇り一は自由黨子と自
稱する某。まづ例の通りコップへ水をついで呑み。臆の
透を撫乍らエ。ンオホン諸君よ拙者は見目噂鼻説を速升
サテ見目とは何ぞや歌の文句云く。人のみる目も何のそ
のト。噂鼻とは如何曰くナンマカ二階が紙屑臭い道理でお
鼻が越後獅々ト是なり。サレバ藝妓がソレツヨイ。ト可
笑な見目をすれバ。お客が忽ちあいつはメたりか出た哩
と噂で知り。山の神が問夫をすれバ早や町内の見目もあり。
遂には亭主も噂よ至る。今や地獄政府は眞言秘密主義を以



て手紙音紐の束縛をすれども。演舌者に見目あり兎耳は噂
 鼻ありと漸く佳境に説至るもや。警部は忽ち中止を
 命之集性條例嘘八百條に照し。聴衆を解散すべしと告たる
 よぞ。満場さながう沸き如く。巡査は打殺せ警部は針山へ
 追登せと。動搖せしなれども。會主を拘引して終に解散せし
 まそ是非なけれ

サヤソくたる号鐘は傍聴席に響き。角張たる鬼員は叫喚
 堂に満つ。議長長髯をひねり乍ら各員へ告るや。是よりいよ
 く第二次會に掛るべしと書記をして議案を朗讀せしむ
 「琵琶湖は疏水に就ては入費銀三千三百三十三匁と三分三
 厘なり。右は區部民費より出さ令る事」と聲いまだ終らざ
 るに十九番暴論吐太氏議長又建議して曰く本員は議案に

先だち聊か志想を吐露せんエヘンそれ本員は建議は遊蕩
 銀行なるもこれを設立し。一株をお約束百即はち廿五圓と定
 め。是を鴨河東西に藝娼はち三千株とつれり。七万五
 千圓は資本を以て一枚五圓宛の小切手を又一割れ手数料
 みて。お客と與るお客は其れ切手を以て登樓すれば。お茶屋
 は其れ切手を以て銀行に來り正金と引換る事とし。是も
 又た一割れ手数料を取り其れ利益と以て琵琶湖に入費よ
 當ん云々と述べたれば。外に二三名は賛成者ありて終に問題
 となり。處十四番は議員雪平甘的氏之を駁して云く。暴論
 君は建議可甚だ可なりと雖も少く廻遠き策なり。本員は
 是より寧ろ遊客は鼻毛一本又付た金一匁宛れ税と課し
 て此れ入費よめてたし。云々。十番欠樽徳利氏また之を駁し

て云には雪平氏に議は妙に又妙に可なりと雖も恐くは
 言べくして行はるべからざる乎。依て本員は原案賛成で五
 坐る。三十八番士瓶六兵衛氏云く。十九番に建議は實に妙な
 れども僅よ七万有圓では資本恐らくは少なからん。十四
 番に説も可なれども資本或は多きに過ん。依て本員は話
 湖に一件を先廢止いたし度。云々。議論區々衆説紛紜
 として言論やうやく面白き真最中末席に列したる議員一
 茂三成氏大聲を發して曰く。議長拙者はチエット小便にま
 る。此段御届け申す。時に時辰と四時を報せてチエット小便にま

ン
 く

○第七報
 燈眞路次に暖昧宿に小娘お染が借枕
 竹根新地に舞踏場に舞妓勇菊が落籍

格氣の角や煩悩の火よて焼てふ瓦屋橋。世渡細き燈心路次
 と。間て地獄の鬼門隅。かの制札の裏家とて。小軒並びの軒暗
 燈。一す。一服。二本。一本。一服。一錢。お小休。御待合は氣樂亭。或は池
 の尾。さ。が。り。藤。う。め。松。さ。く。く。様。々。の。家。号。を。配。す。提。燈。も。好。み
 手水鉢。掃き掃除。さる。行。届。く。表。構。え。と。臺。所。火。鉢。の。側。の。茶。細
 には。燭。せ。ぬ。徳。利。香。ぬ。猪。口。西。洋。船。來。の。水。香。は。ピ。ール。の。瓶。と
 比翼を誓ひ。茗。盆。には。長。煙。管。の。必。らず。連。理。を。契。り。て。居。り。蟬
 の老婆は。三。毛。の。猫。と。共。な。巨。魁。に。眠。り。山。出。の。下。婢。は。八。方。の
 下。煎。豆。を。か。ぢ。る。人。氣。少。な。壺。中。の。仙。境。飛。行。自。在。の。始。婦
 婿男。隱。形。の。術。に。巧。み。なる。下。等。藝。妓。旅。舍。檢。分。の。杏。香。よ。驚。く
 者にあらずんば。他人の知ざる樂界なり。離亭の四疊半に人

二十四 目はいかる男女の出合。是なんお染と久松よて「アノお染さ
ま貴娘と斯して密會ては居るもの。若や新聞よでも載さ
れはせぬかと夫バつかり案じて居ます。あの久松とした事
が又しても新聞くくと恐がる程の事でもな。其の記者と
ても丸で戀知せでも有まい。何の彼のと記て載のは自身
出来ぬ岡焼悋氣。夫な事を心配するよりは一棒子が作りし
端歌戀のいろはの新聞紙。浮名を直し起請とは。晴た戀路ぢ
や無かい「し」と文句の通り打遣て。野暮な世界も面白う粹
よ送るが色どやら。サア一献とさす猪口を受取ながらまた
久松新聞の案じは「アア」として。山崎のならぬは木梨
散人。平日光る横目とは尙更此比光らして地獄の荒まで穿
りよ来た。と親父の久作が昨夜の茶話。若又ふれが眞實な

らバ何か一調伏よ逢はせぬかと云つ。ホツと溜息を突バ。
お染は又もせ。ら笑ひいくら木葉の目光つても。巡査も
知ぬ此家の趣向。よもや曖昧宿まで氣はつくまい。と口では
云ど心よは風の音まで氣よ掛つ。忍ぶは戀の習ひとて。とつ
と手よ手を何よも云す。障子よ映る影法師のニツが一ツよ
なる折しも。表は陽氣よ菓子賣が夢妨たげる聲高く「お馬さ
んで「ヤンコ」く。お菓子とお錢と交易しよ。お馬さんの背
中よ千兩箱負た福。ヤアお馬さんで「ヤンコ」くと叫べる
聲よ驚く二人「オヤ」びつくりした
お坐敷の御愛敬。瓢箪山はあぶり出。辻占でござい。山さ
や豆「接摩の笛は誰が三絃よ和してか。自から合奏の曲を
な。豊年おふいの太鼓は何樓の鼓よ混じてか。又た兩鼓の

聲をなすともす土地とて軒暗灯夜を盡みせし別世界持よ
 行く客振れた人と。袖すり違ふ街の群集送り迎ひの男衆と
 呼物も行く樓婢まで。色で迷はす花薔薇笑める中よも針わ
 りと。誰か知べき六玉川七個八個の合詞紙券の数の争ひよ
 可愛目元よ角立る舞妓もありと聞説く。老妓たちの魂膽は。
 振たが真か惚たが虚か。分らぬ間をお客と名け。分つた人と
 パ帯と緋号す。其の手よ乗すはまた此手。四十八手の品換て。
 團扇手拭寒見舞紋日々柄の約束は。二ツ三ツ四ツ六かしき。
 茶屋の氣取と俳優の交際。サテハ他所行芝居見物。妹妓が紅
 裙の裏までも。氣よ氣を配る染直し。湯のし紋抜き洗ひ張り。
 豊川稻荷に摩利支天。神へ寄進も相應よせざれば吾名と汚
 すよ似り。お寺の勤化と町内の不勤料まで混交て借金中に

襦を持つ内患外憂常節氣。利足の飲と花の飲合ても足す合
 ざれば。足ぬ中から好郎お貢ぐと苦中の樂とせり。夫つらく
 と此事を思へば。愛き苦海のありさま。その浮きふりの繁け
 れば竹根新地と云ふも宜べなり。爰に其苦と脱したるは廣
 瀬勇菊と呼ぶ舞妓。おて歌舞練場の躍の時。東京人お見初ら
 れ。しが縁の端。三千圓おて落籍する約束。早く翻ひて。一力樓
 お引祝ひ。馴染の藝妓。お間迄離し立たる千秋万才。めでたく
 此處にのる玉の腰入いはふ人々。はイヤお開きと立開まで
 送り出して。聲々お勇菊さん御機嫌宜しうお早うお飯りや
 すと聞て。おつあり流石は猫釣。ハア小便垂して戻つて来エ
 (但し此詞は。お客の耳へ入ぬと知べし)

量秤新道の裁判處に目玉判事が宣言

○第八報

業道河岸の警察署に稱揉警視が尋問
 娑婆と地獄の差別なくいと繁昌きは裁判處にて青野鬼六
 がふんどし取戻しの訴訟。鬼一法眼が牛若丸との対決。鬼童
 丸が市原野にて牛の皮紛失の公判。茨木童子が片腕紛失に
 付て渡邊綱を對する要償。味噌屋粹七が隣家の淨瑠璃太夫
 を轉宅の願。鹽谷判官より高の師直に對して謝だくの名
 譽回復の談判。大經師茂兵衛が奸通の審理等。業の秤の休暇
 なく淨皮犁鏡に蓋する時無き。いそがしさに今日も重罪裁
 判を開さける。まづ御白洲の正面には目玉判事罷を捨り乍
 ら着席すれば。左右に檢事勸解。由氏書記細川勝元。倍席判
 事山名宗全氏。檢察官大岡越前等。各々上下正して居并びた

る庭には榛澤六良氏繩付と引出せり。登時判事君は問魔大
 の眼をひいて曰く。地獄府下責苦通八丁目角町西入る一丁
 三十六番地淫賣業鬼神のお松。并びお親代下總筒戸の強賊
 稻場鬼門。弁護人大坂新町橋の住人雷神の庄九瓦等。よく承
 たまはれともく。鬼神のお松は鬼も十八才の比る。山茶の
 出花を父お香して毒害お及び。且母のすねを噛り以て肝を
 盗みて出奔の路次。浪松峠にて武士を殺し。其金を奪ひて武
 州淺草に一家を設け。石の枕を以て多くの若者を傷め。而
 己ならず芝の石濱おは玉虫と号して信乃現八等お刀向ひ。
 讃州高松おては梅次と名乗て朝日新聞の厄介とな。り京都
 おは蛇バみお市と名を變て大家を滅亡せしめ。後に奥州黒
 塚におもりて姓み女の腹と裂き。胎内の兒と鹽漬として錦

小路の朝市に出す等。其罪最も輕からず言語同斷不埒至極なる事は。証據人合津の小哲ノツボの竹及び木塙の藤兵衛が陳述と。犯罪の用に供したる人切腹丁ならびに五條中島警察署の尋問書と。依て罪跡己に明白なり。去せも尙弁護すべき事あらば申上よと聞て雷神の庄九良は揉手拭を。乍ら。オイ判事殿一寸まつて貰やせう。全牀はのお松女は好んで人を殺さないのだ。何せと云て見ない男の方から石の枕と。お來から自業自得で命がチイのさ。夫をべら棒な。お松お罪をかぶせられちやナト填らチイ話。ちや有やせんカ。黙れ雷神其方は罪を旅人に飯せんと。とも。石の枕が有。からする旅人も有るなれ依てお松の罪はいかお弁護するとも免るべからず。今之を新舊兩律お對照して石の枕金ある

嘘八百貫文の罰金を命ぞ。且つ無間の釜焼を百日申付べきの處。聊か情を酌で針の山の掃除七十五日間致すべき事と判決せり

九十四
善因あれば善果あり惡の報ひは惡果と招く。瓜の種より煎子は生ざれども因あれば灰吹より蛇も出べし。その善惡の政道に寸分のあやまり無は量秤に掛て見が如き。業道河岸の警察おは。髭揉君出席して尋問をぞ始めらる。一盞の。ア景清の行衛はと。云ふ体裁みて問るやう。大日本京都姉ヶ小路妹の圖子北利北八の抱ゑ娼妓高尾其方儀。石井常右衛門が行衛知ぬとのみ云張ども。祇園社内。の寫真師成井某の撮たる二人の寫真を所持するからは。夫より下河原に一宿

いたして石井を龍動へ落やり一相違あるまいだが高尾
 其方と石井が馴初一元はいかい是も序ふ白状せよと云れ
 て高尾は恥しくやうくに答ふるには妾が吉原に店を張
 る比石井さんおは毎夜の素見いやだ母親さん巡査の媽ア
 と流して通る鼻歌の聲にはれたが身の落處お奇なんしと
 差出す煙草の煙うすくとも胸一盃の思をば目おも云しつ
 玉章おも書つ互ひお二世と契りては雪の後朝月夜の身搦
 り花と云ば線香の短かさ時の間の離れ刃のさびつ
 いて切お切れぬ悪縁の深うちぎり一常チヤンの行術どう
 有ても知いせん知ぬと有は知ぬにして責道具の強問にて
 云して見んソレ鬼ども申付たる品是へと下知お依て持來
 は水責火責と思ひの外デーンく太鼓に笙の笛里の土産お

賞ひたる武力のラツパを并べられ高尾はハツと驚ろさ
 がもう斯なれば百年目と破太鼓を打叩きハア豊年ぢやく
 花お遊バ祇園あたりの色揃え東方南ぼろ北方西方彌陀
 の淨土がぬりに塗立びつかり光りひかり輝く柏屋藝妓に
 いかな粹めも現ぬかいてぐどんどろつくツイくノツイ
 聞澄したる髭揉君豊年踊の詞お寄て忠臣蔵の七段目茶屋
 場のさはぎを述るからは常右衛門を駕お乗せ龍動へ落せ
 一とは石お變し九太夫が計策おて實は一力の楹の下へか
 く一有お極まつたり是より特務巡査お命お召捕せ鴨川
 の水雑炊を食はせんと此日の應は果にける

○第九報

見目通に噂鼻新聞の發行
 金番町に爪火銀行の開業

見目通の三町目此比開き一新聞社あり之を喚喚新聞といふ記者は先比死去され一梅の大坂の粹筆家名此花の女殺し津田貞君と式亭三馬を雇入れ爲永春水十通舎一九の續物語。蜀山人と小西某氏と補助として時々社説を書といふ。社長は龍澤馬琴よて二三日前第一号と發兌され主義は古めかき自由民權の溢紙新聞なれども保護金を仰ぐ官權よりはまじならんといふ評判なり。サテ今日の社説は清佛の戦争と宗教論よてエツ、國子を喉へつめるやうな堅い論なり。次は雑誌よて閻魔大王は御惱はげしく依て侍従朝夷奈三良をしてセソフリを買ふやり。鎮西八良爲朝よ命じて藝目の法を行はせらる。俄鬼國の使節飯九位朝氏の響應として針の山の月見の宴は來る十八日なりとかし

石川五右衛門は無間の釜を破りて何國へか逃走せりとか數件の後は例の寄書なるが三途川頭渡舟鬼人といふ名前よて。淨皮梨鏡と法律の關係といふ説と載たり。其次欄の雜録は馬琴氏の單任よて傳信記評と題して頻々此の記を惡口せられたり。その大意をあらく記さば。此比地獄又彷徨ひ來し木葉てふ鳴呼の白痴漢が物せし地獄傳信記なる書は。慢に馬琴が寓意よ擬て事よ托して理屈がまじき口を叩けど。似ても似つかぬ醜女の顔み安浪杜撰文よ法なく。筆よ絞な一只是一個の寝語のあまり。實に浴中の紙費えといはさくのみ。さる物の本を論議うはいと大人氣なき業乍らいな。か爰よ不都合なる件々を云。バ。發端と第一報とは許しても。免しがたきは第二の淨瑠璃ありふれたる塵芥た、きな

四十五

る事々々く載し可笑く。第三第四は何の爲せしか
 文の旨意さる判然せず。殊に第五報は木葉が得意の助培論
 女又惚られた事もなくして色事指南もすさまじい。吉原廓
 は北向か西向か夢も見ざる東京詞京傳三馬の先達おも
 恥す粹學ふりたる女良の穿ちは愚とや云ん狂とや名ん。第
 六報は聊か時世を見いやうなれども是とて愚論見お足す。
 第七報は穿ちいやうお自分はたとひ思ひ居とも人お聞た
 る老妓の内幕まだ云足ぬ抜目を悟らす。いづも青樓は新聞
 主義交際段階子を踏とも自ら一本の線香も買ぬ癖して。
 花の符調も面白からず。第八報は宛る俄狂言を見ごとく是
 又古い趣巧なり且又編中處々に已れが名を入は虚名を
 賣まく欲する業か。左程お名か賣たくバ神社佛開悉とく染

手拭又名と記して奉納せば書を著して名を賣よりは近道
 ならん云々其次は廣告おていづれも賣薬多し右は第一号
 の紙上の体裁もて随分おもしろきやうなれども看官の附
 およれば是も光秀新聞おて三号位で棒がホキリて有うと

いふ

諺云ふ地獄の里も金次第。金が仇敵のくり言は娑婆と同
 じく財政困難。此比の童謡おも金お怨みは数々ござると云
 程おて人參看で首く、る亡者の多さを大森卿爪の長利君
 愛のわより。金融論を主張され地獄の財政は輸出入甚だ不
 平均なり其故は亡者の来るや六文の入獄税を持参して是
 おて海關税も共お濟す事は昔も今も同様なり。然るお本國
 の物價は日々お騰貴し。亡者ますます困窮して到底六文の

五十五

税金もては此の困難を救ひがたし故に今より娑婆へ廣告して六文を更お十二文とせば金融初て自在ならんといふ論を錢屋五兵衛と三井とが聞き夫では却て地獄不樂昌の基なりなせならば他お極樂と云ふ無代價おて入國させる淨土あり如何お治外法權の流行時節だからと云てわづらはしく多くの税を出て地獄まで賣られお來る馬鹿者おらんや因て吾等は有志者と謀り一株一万圓の株をつのり銀行を設立して其集金を以て娑婆の鉄道または商工業の店を開き此の利の半を以て亡者入獄税お與ゑ六文の處を三文お價下すれば亡者の入國多く地獄の繁昌期して待べく亡者多くて益お満るを見ればその人夫を雇ふて針山を堀ば定めて大層なる金銀と得べきや必せり是れ一は本國に繁

昌を致し一は貧民就産の良法なり云々と建言して終お爪火銀行を開業する事とはなれりその開業式の景況は娑婆と別段かはりし事なれば爰お漏す

○第十報

閻魔の天長節お公園地の朝市
 地獄の皇靈祭お賽河原の夕涼
 天長節は毎年七月十五日おて此日大王の地久天長を賀するどて地獄の罪人を大赦あり益の蓋を明て娑婆へ放免あるがゆゑお娑婆では此日を盆會とておの無魂を迎ふてさまぐ供養する事なりサレバ亡者は今朝早く各が故郷へ坂路土産を買お公園お集まる様は文王の靈園おは非ざれども之を營し之を經し西より東より山列ねたる朝市七十五店サアく角の大安賣象牙の白い大いので太さは離やら

の何やらはと有のが僅か一本五十銭夫から中等の中位は
 車屋符調の十五銭より六銭五銭と段々安く下々の下等
 は三本で一錢ぢやア彼方は盆の牡丹餅うりオツ牡丹餅
 ホイ牡丹餅棚から落た牡丹餅で御坐い。サア真黒で大きい事
 は乳母どんのお尻も全然そのお尻から出る小便の十六文
 で二ツあげます。サテ又向ひは念佛店にてお寺の豊年念佛
 の大安賣ぢやの撰どり見どり六字の六文ブツとふくれたの
 が風呂ねんぶつ。アノと臭いは雪隠念佛。ちいみ上つたは盗
 賊に逢たびつくり念佛。何とも無のが相の手ねんぶつ。ハア
 ！どしたのが欠伸ねんぶつ。夫から後家の色氣ねんぶつ。取
 ひは坊主の仕込ねんぶつ。隠居が腰と伸し念佛。お婆が嫁を
 いぢり念佛。長し短か一曲ねんぶつ。曲つた小僧の居眠ねん

ふつ。其外およそ四十八通の念佛でございと吐鳴みなたは
 題目市サア諸君もお求めそバ！ませ。後五百歳廣宣流布と
 看板打たるお題目は昔一鎌倉時代の此る本師上行無變身
 菩薩が日蓮上人と申せ！時。本門佛立の四箇の格言から。長
 松清風と心を合して一致勝劣八品八派十六本山中山一流
 八才の龍女も成佛得脱させたといふ。いとも結構なるお題
 目とさすが宗旨の堅氣とて。賣るさる誇る自説の聲を破れ
 太鼓の音までもいと喧ましく聞えけり
 そもく地蔵の皇靈祭は毎年春秋彼岸の中日に賽の河原
 中央へ石れ塔を積上る祭なるが此祭おはつて後れ夕す
 いみ緒空千天むすび湯葉焼鉄推茸さつや平なぞ。喰物店を
 初として出列ねたる興行物二わかチモンガレあはたら経

カツボレ踊に曲三味線。猫は蚤取り。猿芝居。田樂法師。願人坊
 片輪娘。二成奴。古え今れ混雑はさすが。地獄は繁昌なり。ふ
 だらくや岸打つ浪は三熊野。那智れみ山。響く瀧つせ。南
 無大慈大悲と唱るあり。四國は讚州。那加郡。象頭山。金毘羅。大
 權現。大山。大聖。不動明王。か山は晴天。不士は山間。市無行者。大
 ぼさつと云もあり。そも御開山一流五勸化。趣きは。た
 い南無阿彌陀佛なり。と心得べきも。れなり。穴か！よくど
 飯命無量壽。如來と看板。又使つて南無不可思議に。錢をまう
 ける。賣僧法。高野山。弘法大師。れ御本願は。賽錢。れ多少に依て
 利益。れ多少あり。去。一。文。れ錢。は一。佛。淨土。二。文。れ錢。は。二。佛
 れ御守護。三文。なれば。三。尊。來迎。と。へ。イ。ロ。ン。ヤ。ノ。チ。又。櫻。り。ち
 らして。マカボ。ダラに。錢を。集める。今道心。天。清淨地。清淨高天

原は天照大神。北方釋迦牟尼。西方あみだ。南方寶生。東方は
 降三世軍陀利明王。四大天王。八大龍王。十六善神。と祈り立る
 俄か山伏。訪て玉つて。嬉しや。な問れた。甲斐も恥か。し。死。吾は
 地獄で朝夕。れ水責。火責。はい。どはね。せも。娑婆。も。存。した。盃。れ
 そ。ま。よ。溜。り。酒。れ。香。が。鼻。よ。止。り。て。今。迄。も。成。佛。せ。ず。居。わ
 い。な。と。哀。を。さ。そ。ふ。梓。巫。女。冥。土。れ。旅。へ。寺。入。れ。師。匠。は。彌。陀。よ
 つ。釋。迦。牟。尼。佛。六。道。能。化。れ。弟。子。よ。な。り。賽。れ。河。原。で。砂。手。本。い
 ろ。は。書。兒。は。あ。へ。なく。も。ち。り。ぬ。る。命。是。非。も。な。や。翌。の。夜。た。れ
 か。添。乳。せ。ん。ら。ひ。う。る。目。みる。親。心。つ。る。ぎ。と。死。出。の。山。け。ふ。あ。
 あ。さ。き。夢。見。し。心。地。し。て。跡。は。門。火。も。え。ひ。も。せ。ず。と。見。盡。と。首
 引。を。する。下。手。淨。瑠。璃。地。獄。は。苦。處。さ。ま。ぐ。の。中。よ。附。の。釜。入
 と。人。の。肝。と。る。湯。よ。入。る。何。も。彼。も。あ。る。紙。の。橋。粹。な。責。苦。よ。野

暮らし。コナヤはちや焦茶の鬼ぢやものと宇治茶の換歌
うたふもあり。陌頭楊柳の枝豆やゑだすめ。今春風も吹せ
立の薩摩芋。妾が心ろまさは断絶するめの付焼君が思ひ向
ぞ汁粉せんさい餅と物賣る聲も唐詩選。學者の果か大道店
實又人間の塵捨場。飯も名けて地獄ぞと知る、までの繁昌
なり

○大團圓 閻摩の廳より賞状を賜ふ

地獄の滞留日永く大跡探訪！ 尽いたる比。接待掛より参内
すべき旨報知あり！ かバ。木葉は彌次良兵衛方を立出で早
くも御車寄まで出頭すれば。接待掛アピラウケンケン氏出迎
へ。謁見處へと案内す。そも此處の結構は玉坐の邊り。首皮
梨鏡を据ゑる。左右具生具命神青鬼黒鬼居並びたる。暫し、

て警蹕の聲嚴をかよして閻摩大王山御成り。かたぢけなく
も勅一玉はく。汝木葉散人地獄の實地探訪の爲よ。遠來せ！
段朕深くその功勞を賞す。今日は此地を發して極樂へ送つ
かわすに付き。聊か送別の意を表せんが爲よ。爰汝を謁見
併せて賞状を賜ふ。その賞状たるや世間一般ありふれた
るもの。非ず。是れ實又娑婆の人々への異見なれば。汝よく
之を躬せよ。とて賜はりたる賞状を披見すれば。如何も粹な
異見。又て其の條目。曰く「一。酒は呑べ。酔べからず。酔バ
必ず心を失なふ。一。青樓へは行べ。泊るべからず。泊れば
必ず轉ばす氣になる。一。妾は置をも下女をつまむべから
ず。摘めば必ず苦情をおます。一。色は好むべ。ふけるべか
らず。ふければ必ず其身を亡ぼす。一。喧嘩とすると。眼を



はるべからず。張ば必ず警察へ引ばられる。右は新作の五戒
 なり之を守るときは心安し名けて極楽といふ。之を破れば
 懲役となる名けて地獄といふ。木葉此の賞状を見思へらく
 隨其心淨即佛土淨と維摩が寢語も宜なるかな。五戒を守れ
 ば人間もまた極樂。五戒を破れば即ち地獄。只是れ已れが性
 神一ッ。清むと濁るが天地の相違。三界唯心此世も地獄。見性
 成佛滑稽も亦た佛法。青樓で悟れば藝妓も菩薩。寺院で迷へ
 ば僧侶も獄卒。似心傳心つゝまる處が色と金。野暮な浮世を
 粹よした閻摩も大分遣つた男か。譯つた異見は娑婆への土
 産。早やお去バと暇を乞は地獄の宮殿。忽ち風に船と變ま
 つ、西方遙かに極樂へ。さして飛ゆく其跡は陸海軍の兵卒
 の祝ひ奏する音楽の聲のみ空に残りけり

編者云是より極樂のありさまは其名を換て極樂新繁
 昌記不日に報知のある筈なれば是又共に御評判を乞
 ふ

地獄傳信記跋

吾友木葉詞兄著地獄傳信記乞跋於余。余未知其所謂傳信記者果記如何之事書何樣之事。是以臨文茫乎如擗尻欲吹法螺頰弗可得也。雖然木葉散人西京馬鹿大將也阿房底拔男也。以其馬鹿才阿房力著此書因思此書之馬鹿具阿房數事不借戶長樣公証十分分明矣。此書既馬鹿具阿房數又何臨文思案投首爲撈腹筋喚儘兮以出鱈目文句始塞其責哉。抑余亦一箇道樂者陷地獄受其苛責。日甚一日。然尚幸保蟲之息存命罷在矣。乃時有認珍

事又托傳信欲通木葉詞兄。詞兄請其時宜數頰。

青軒 孫柳情史跋

京都七大人撰

一 京 花 集

全寸珍美本

定價金拾五錢

狂詩狂歌狂句俚歌俳句詩探等京都七大人ノ撰マレタルモノナリ

曲亭馬琴翁著

一 昔 語 質 屋 庫

洋綴美本

定價金八十錢

但マ豫約直段金四十錢ニテ賣捌候

一 現 條 例 規 則 要 書

寸珍美本

定價金廿五錢
郵送稅共

○地租○徵兵○徵兵事務○酒造○煙草○代人○區町村會○墓地及埋葬○爲
替手形約束手形○郵便○地所質入書入○建物質入書入○民事訴訟用印紙○
證券印稅等ノ條例規則稅則其他有關スル御布達ヲ不洩覽集シタルモノナリ

判事十野巽題字 判事補澤正太郎校閱

一 現 民 事 訴 訟 必 携

並上綴

正價金五十錢
金四十錢

一 證 券 印 稅 規 則 心 得

附訴訟用印紙規則

定價金八錢

一 古 物 商 取 締 條 例 俗 解

但京都府細則ハ無代價進呈

定價金十五錢

一 質 屋 取 締 條 例 註 解

定價金八錢

一 概 報 國 纂 錄

全五卷

合壹冊

定價壹圓廿五錢

近日發兌

一 新 規 則 何 指 令 叢 書

近日發兌

定價金三十錢

十七 二 行丁
十八 二 行丁
十九 七 行丁
二十 七 行丁
廿一 七 行丁
廿二 七 行丁
廿三 七 行丁
廿四 七 行丁
廿五 七 行丁
廿六 七 行丁
廿七 七 行丁
廿八 七 行丁
廿九 七 行丁
三十 七 行丁

○ 正 誤

止^{とへん}邊ノ止ハ此ノ誤

鈕ノ字ハ叙ノ誤

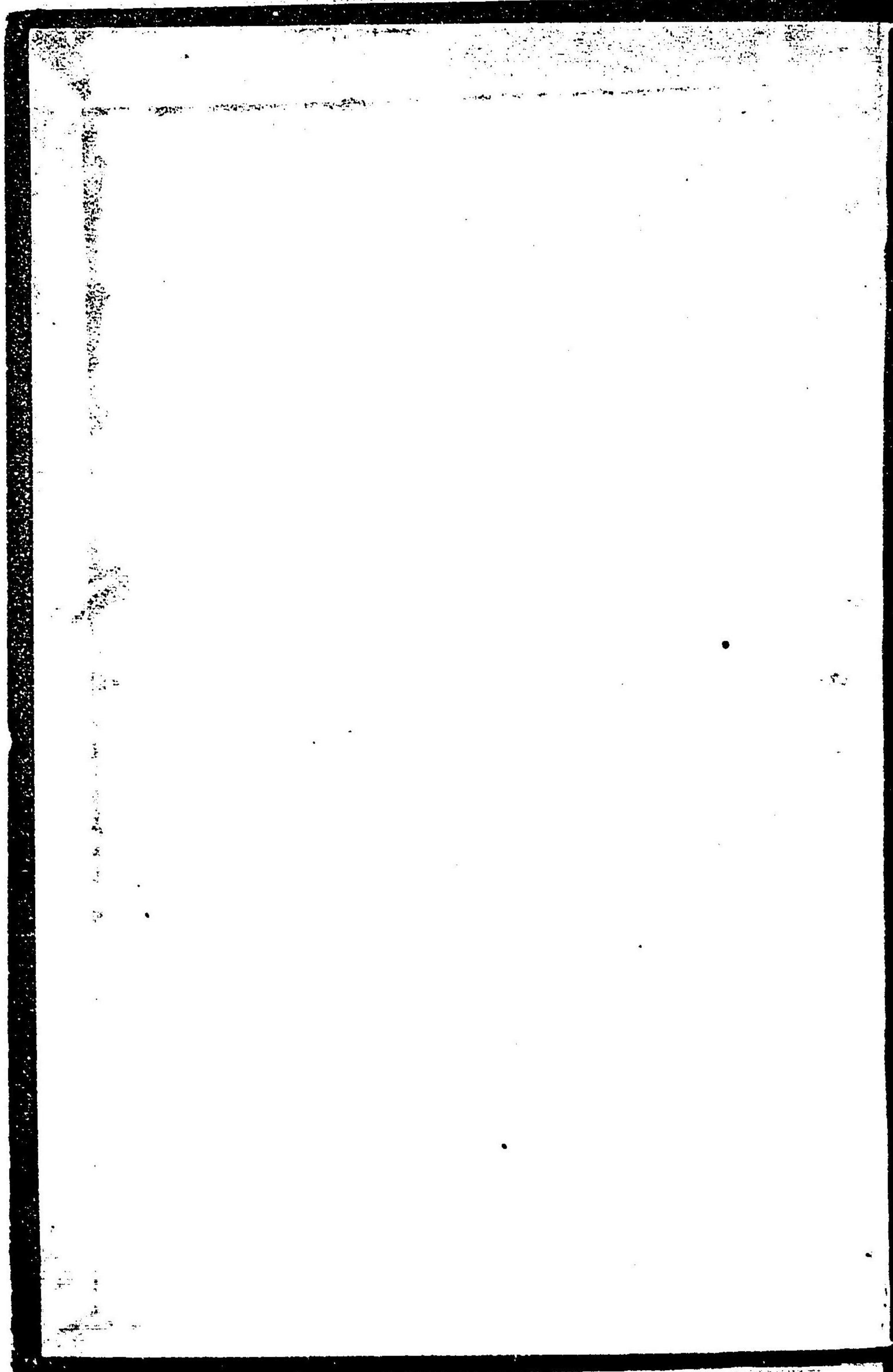
裕衣ノ裕ハ浴ノ誤

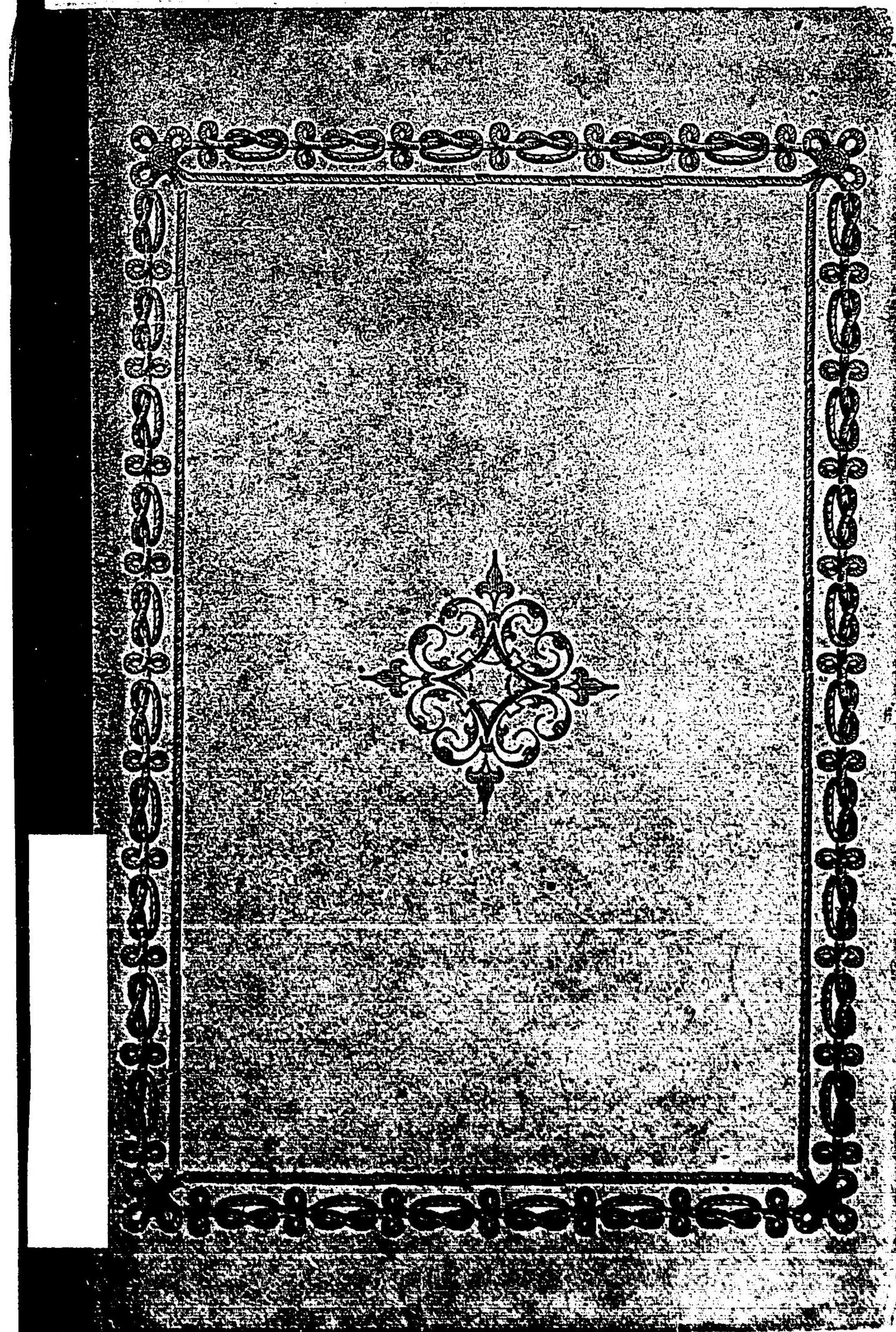
川下ノ仮名一たハ一もノ誤

見ないノ問ニさノ字ヲ脱ス

置をもノをハとノ誤

以 上





特 11

490

浮世道中
地獄傳信記

著者 芥川龍之介



091739-000-7

特11-490

地獄伝信記

浮世一分五厘庵／編

M18

DBO-0213

